野田笛浦『得泰船筆語』について

國金海二

江戸後期に野田笛浦という詩人がいる。丹後田辺（舞鶴）に生まれ、名は逸、字は子明、通称は希一郎（希一）、笛浦と号し、別号を海紅園といった。

今日ではあまり知られていない詩人なので、その経歴を『加佐郡誌』（大正十四年、京都府教育会、加佐郡部会編）、『舞鶴』（大正十二年、水島彦一郎編）などで少したどってみたい。

野田家は、田辺藩主牧野氏の世臣であるが家格はあまり高くなかったようだ。

笛浦は寛政十一年（一七九九）己未六月一日に生まれ、文化八年（一八一一）、十三歳で江戸に遊学し古賀精里の塾に学び、その後、精里の息侗庵が儒官であった昌平黌の寮に入った。

昌平黌時代のことは、その詩に少し見えるが、詳細はほとんど不明である。

彼が世間にその名を知られるようになったのは、後述する清国の漂着船「得泰」号に関係してからであり、それは二十八歳の時のことである。

この得泰号事件後、五十二歳で田辺藩に呼びもどされるまでは、江戸に在っては茅場町に居をかまえて家塾を開き子弟を教授したり、また大阪にも居住して塾を開くとともに中井氏の懐徳堂にも出講していたようである。

その生活については明確にできないところが多いが、詩文の交わりが主ではなかったろうか。その詩文に散見する交友関係の一端をみると、菊地海荘・奥野小山・森樅堂・後藤松窩など、また先輩として篠崎小竹などの名がみえる。

このような文人たちとの交遊の間に詩文家としてもだんだん世に認められるようになってきたようだ。

詩人としては『摂東七家詩鈔』（嘉永二年刊）に名をつらねている。他の六家とは菊地五山・安積艮斎・大槻磐溪・斎藤拙堂・梁川星巌・中島棕隠である。（同年、同じ書肆から広瀬淡窓・旭荘・篠崎小竹など大阪以西の詩人六家の代表作を選んで『摂西六家詩鈔』が刊行されている）。さらに『嘉永二十五家絶句』（嘉永元年刊）にも選ばれている。

また、斎藤拙堂・篠崎小竹・坂井虎山とともに文章の四大家と称

せられたように文章家としての名声もあり、それらで生計も維持できたのではなかろうか。

文人以外との交遊については笛浦自身や他家の詩文にも管見に入ったものはほとんどないが、福沢諭吉『福翁自伝』で父百助を語ったところに下記のような個所があるので、笛浦の人柄を知るための一資料として挙げておく。

「……父が大阪にいるとき山陽先生は京都におり、ぜひ交際しなければならぬはずであるのに、ちょいともつきあわぬ。野田笛浦という人が父の親友で、野田先生はどんな人か知らない、けれども山陽を疎外して笛浦を親しむといえば、笛浦先生は浮気でない学者というような意味でしたか……」

江戸や大阪で自由人として生活していたらしい笛浦に帰藩の命令が下ったのは嘉永三年（一八五〇）であった。藩としては、尊皇佐幕、開国鎖国の論のうずまく世相の中、人材登用の急を感じ、交友範囲も広く、見聞するところも広い笛浦に帰藩の厳命を下す必要があったのであろう。

田辺に帰ってから最初の七年間は側用人として、安政四年（一八五七）からは執政（二百五十石）として藩政に専心する。特に力を注いだのは藩校明倫館の整備と海外の敵に備えるための砲台の築造であった。

これらは作詩作文のいとまさえないほどの激務にちがいなく、文人としての笛浦の名はしだいに埋もれ現在に至っているのではないかと思われる。

藩に帰ってから十年後、安政六年（一八五九）七月二十一日、六十一歳で没した。舞鶴尾の辺無常院に葬る。法名は栢林院殿念誉亭称居士。

さて、漂着船得泰号事件とは、文政九年（一八二六）、清国の商船得泰号が上海沖を航行中、風波に流されて駿河の清水港に漂着した事件である。

この時、清水の代官羽倉外記（名は用九、号は簡堂。精里の門人。その編著に『従吾所存』『非詩人詩』などがある）は幕府に稟請して筆談のできる者の派遣を求め、侗庵は笛浦を推薦し得泰号を長崎に護送する任に当たらせた。笛浦は清水より乗り込み、六十三日をかけて長崎に送った。

この漂着船のことは、当時大きな話題となったようで、松浦静山『甲子夜話』（巻七十五）や『兎園小説外集』（滝沢馬琴を中心とした数名のグループが奇談珍説を筆録したもの）などに採りあげられている。

特に『兎園小説外集』には「唐船漂着の記」として詳しく記録されている。

それには代官と船長とのやりとりの文書、大目付への報告書、船籍、船型、全乗組員百十六名の氏名・年齢・出身地までが記されている。また、この船には、七年前に難破し南洋方面に漂着し、そこで数年を送り清国船に救われ浙江省乍浦から送り帰されるために乗船した日本人三名がおり、その漂流や南方での生活の様子などが羽倉外記と中泉の代官竹垣庄蔵へ詳しく上申されており、それも記録されている。

ちなみに、この時の二代官の処置は当を得たものであったのであ

ろう、『続徳川実紀』文恭院殿御実紀の文政九年十二月の項に「代官羽倉外記、竹垣庄蔵は、遠江国下吉田村へ唐船漂着のをり、彼是奉はりしにより、時服、黄金を賜ふ。」とある。

『外集』の最後に「右唐船を長崎まで送り遣さるるとき、林家より筆談の為、学問所の諸生二人を、遠州までつかはして、同船せしめらるるといふ。この諸生等帰府の後、必異聞あらん。たづぬべし。」とあり、その諸生の一人が笛浦である。

そして長崎までの船上で乗組員である清国人と筆談したものを後で整理し刊行したものが『得泰船筆語』（紀州藩瓢葉館蔵版、上下合冊で刊記なし）である。

得泰号上で筆談をした清国人は五人、長崎の唐館での筆談も載っているがその相手は一人である。

船上での主な相手は、楊啓堂・朱柳橋・劉聖孚の三人で、『外集』によると、楊氏は船主、平湖の人で二十七歳、朱氏は財副、平湖の人で四十八歳、劉氏も財副、杭州の人で三十一歳。ほかの二人は一言二言話をかわしているだけである。

楊・劉両氏について知ることはこれだけであるが、朱柳橋については『筆語』のなかに、笛浦の質問に自ら次のように答えている。

「諱濬発、号慕亭、任山西福建邑令、擢陞州牧、賢人文公後裔、至不肖棄官行賈、可慙之至」

では、その会話のなかからいくつかを挙げるが『筆語』に限っては、若干の説明と句読点のみにとどめた。

向学心に燃えていたにちがいない二十八歳の笛浦は、はじめてなまで接するであろう中国人に――とくに文公の後裔と称する朱柳橋には尊敬の念をいだいて――中国の思想・文学について筆談し、また質問を発している。

しかし「雖係文公之後裔、今為商賈久、荒学業、自愧殊深」（柳橋）というのは単なる謙遜ではなく、その答えの中には笛浦の未知のことはほとんど無かったようであり、あまり深い問答にはいたっておらず、『筆語』中に占める学問的なやりとりの割合も少ない。その主なものを二・三挙げると次のごとくである。

。清代初期の程朱学者である陸稼書と、明の滅亡後、清朝に仕えず、後にその著作が発禁となった呂晩村などについて。

笛浦「康熙而還奉洛閩之説者、余服陸稼書一人、李霦霜周聘侯輩非其倫也、呂晩村卓識蓋出陸之上、薛敬軒之後未見其比、然晩村明代人、非貴朝之人也」

柳橋「陸稼書先生浙江平湖人、与僕同里、為我朝道学第一、非余賢可比、晩村明代人、帰我而不臣、故書集我朝棄禁不観」

笛浦「晩村之不臣於貴朝者、是余之所以最信晩村」

。乾隆の三大家といわれる袁枚、趙翼に匹敵する詩人をたずねたが三大家の一人である蔣士銓の名などは返ってこない。

笛浦「袁子才趙雲崧共嘉慶年間之人、而文藻該博、雄視一世、不知貴邦当代有比肩者乎」

柳橋「袁子才趙雲崧共嘉慶年間之人、而乃当世所称文人、其余下者甚多、不能記臆也」

。清代前半の詩を集めた『国朝詩別裁集』については、反対に柳橋からすぐれた詩人について質問され、王士禎・宋彝尊・宋琬・施

閩章の四家を推すがその詩は笛浦の意を満たすものではないらしく、また沈徳潜の編集方法についても意見を述べている。

柳橋「国朝別裁詩、以何人為翹礎」

笛浦「余未細閲、然各有所長、難一筆定其甲乙、王朱宋施四家尤属詞壇老手、是以当代推重尚、不満識者之意、帰愚宇伯別裁詩、選有句無章有章無句者、一併登入、不免失於濫」

柳橋「千古卓見、使沈氏聞之、将首肯不暇」

筆談には、特に笛浦はいろいろな故事や詩句を用いている。これによってこまかいニュアンスを少しでも伝えようとしたのであろうが、当時の知識人の会話についてその一端をうかがい知ることができる。たぶん日本人どうしの会話もこのように行われていたのではないか。

。劉聖孚との閑談の折、笛浦は故郷を出てから十数年、故郷を思わない時は無いと言うのに対して、異国の海上で不安な日々を送っている聖孚も望郷の念にかられると言っている。それを慰めようとする笛浦の言葉をみてみよう。「桑蓬……」は『礼記』内則を、「馬革……」は『後漢書』馬援伝を出典としたもので、男子の四方に雄飛し生還を期さないことを述べたものである。また諸葛孔明の言をひき、さらに『論語』衛霊公を用いているが、最後の「不如妄」は笛浦のユーモアか。

聖孚「僕亦常如斯、但閑坐無聊之余、最易生思郷之念」

笛浦「桑蓬射天地、馬革裹屍、皆男児之事、善哉、諸葛武侯之言云、丈夫遨游何必故郷、因知、終日不食、終夜不寐、以思、無益、不如妄」

。楊啓堂は二十一歳から九度長崎に来ており、なじみの妓女いとはぎがいる。笛浦は唐の詩人賈島の「渡二桑乾一詩」をひいて啓堂の心を察するのである。いわゆる「幷州の情」というものである。啓堂は飛んで行きたいと言っているが行かれるはずもない。笛浦はまた唐の李商隠の「無題詩」を引用して二人の気持ちは通じあっていると慰めるのである。「身無……一点通」までがその詩句であるが下の「無」の字は「有」の誤りか。

笛浦「昔賈浪仙曾渡桑乾水、有幷州故郷句、今子九次往崎、況有萩妓、待子久矣、子之望崎陽、不翅幷州也」

啓堂「我非鳥也、焉得一挙到崎乎」

笛浦「雖身無彩鳳隻飛翼、心無霊犀一点通乎」

笛浦の質問は学芸以外のこと、たとえば金銀銅の産地、船の構造、結婚の風俗、漢満人の融合などいろいろな方面にまで及んでいる。おもしろそうな話を一つ。越前の漂流民が奴児干（ヌルカン）に漂着したとき門の神画に「源判官義経像云々」というのがあったが、清では太祖が義経のはてではないかという伝説があるかという笛浦の質問と、日本の書物で見たことがある、また康熙帝が自ら言っているという言い伝えがあるが本当かどうかわからないという柳橋の答えを記してみよう。

笛浦「我邦越前人、前年漂到満韃奴児干地方、観門前神画源判官義経像云云、世或称貴邦太祖為源判官後、不知貴邦有伝之者乎」

柳橋「以前余観日本書、我朝天子先世姓源、係日本人、今忘其書名、我邦或伝以為康熙帝自言云、均不知其信」

朱柳橋らの中国人も貪欲に日本に関する知識を吸収しようとしている。一・二を挙げてみる。

。秦の始皇帝の命令で、不老不死の薬を求めてわが国に漂着したといわれる徐福について。現在も和歌山県新宮市の南方にその墓があるが笛浦は知らなかったとみえる。

柳橋「紀州熊野浦、有徐福墓否」

笛浦「不知」

。江戸時代、大名・旗本の氏名・系譜・官位・邸宅・家紋などを記した「武鑑」について、その内容と、文武の士を記しているのに武鑑というのはなぜかと質問している。笛浦は末世文弱の弊を矯めるためだろうと答えている。

啓堂「僕以前於長崎、観貴邦人所著武鑑、不知何書」

笛浦「武鑑猶貴邦縉紳全書、開列諸侯及麾下官員爵名、今年某作某県、明年某陞某府、其所記大要如此、然官爵転則時時改換、不必等歳月」

啓堂「武鑑開列文武之士、而何独以武名之」

笛浦「我邦有文武両科、文官以文才取之、武官以武技取之、而至高官顯職任国家之責、則非文武全才無取也、今武鑑内開列文武之士、而其独以武名編者、蓋矯末世文弱之弊者」

このように日本について何でも知ろうとする彼等の日本語力などはどのようであったかを知るのに興味ある資料となるべきものがいくつかある。

。ひらがなは少しは書けたようである。二十一歳から二十七歳のこの時までに九回長崎に来ている楊啓堂は、笛浦のなじみの妓女はいるかとの問いに対して次のように答えている。

笛浦「楊兄有妓麼」

啓堂「引田屋糸萩、試以日本字写之いとはぎ……」

。「いろは」四十七文字を覚えるために漢字をあてはめるという方法をとっている。啓堂の言葉中の「以六合」は「いろは」であり、「日戯目摂世」は「えひもせす」に当たる。しかし長崎方言と中国音の入りまじったこの「いろは」は笛浦には寝言にしか聞こえなかったようである。

笛浦「子知我邦字乎」

啓堂「貴邦字我知之矣、塡以唐音、以六合宜哈醯督赤栗奴路屋哇割与塔列籔此捻那蠟母胡意糯悪苦爺嗎却富哭葉貼阿殺気云滅迷式日戯目摂世」

笛浦「僕未解唐音、故不敢商、恐多錯誤」

笛浦「唐人所説邦語半崎半唐、我等聞之、殆類囈語」

。外出や日本人との交渉もままならなかった長崎に寄港する中国人は唐館の妓女から日本語を覚えたようであり、その方法は暗記が主であったらしい。

啓堂「唐人学日本言語妓女在館中、遷就唐人之言、唐人勉以強記之、不知将筆写矣……」

寝言といわれた彼らは笛浦に江戸弁を習いたかった。そしてその代わりに彩雲開・九連環・焼香曲という中国の俗謡を聞かせようというのである。

これより先、笛浦は俗語の多い『今古奇観』には手を挙げており、それについて教えを乞うているので船中で交換授業が行われた

と思われる。

なお、九連環とは青木正児氏「本邦に伝へられたる支那の俗謡」によれば、知恵の輪のごとき玩具で、その歌辞はなかなか解けないことを歌ったものであり、歌辞には幾種類かがあるということである。（その一つがわが国のいわゆる「かんかん踊り」の名の由来であるとも述べておられる）。三俗謡のうち九連環を参考に挙げておく。「蝴蝶夜飛来……」がそれである。

啓堂「明日以長兄生為師、学江戸言語、弟為先生以彩雲開九連環二曲唱之」

聖孚「弟以焼香曲唱之」

…

啓堂「蝴蝶夜飛来、是夜夜游情人叮送我、九連環九九連環、拿把刀児、割不断児、時夜夜游夜夜游」

このような交換授業といっても教わることは笛浦の方が多かったに違いなく、そのうえ笛浦は持参していた詩文集『海紅園小稿』の草稿を示して柳橋に評および序を乞うている。

そのいきさつは下記のごときものであり、柳橋の序は紀州二木浦で草され、日付は「大清道光六年三月二十四日」と中国流に記されている。

柳橋「笛浦先生所随帯尊著、願乞借」

笛浦「海紅園小稿一巻、係客歳之所作、蕪雑固知不足供大雅之台覧、然僕已辱我翁之知、何有所隠、望我翁之指摘無隠」

柳橋「承示尊著文詩、容細細展読、但恐弟荒陋、不能窺見高深也」

柳橋「諄々命属斗胆、将作加評序、或少有未合之処、僭易数字、不以弟為狂妄乎」

笛浦「言不再」

柳橋「尊作高妙、予謬加評序、恐有未当、尚望高明鑑之」

笛浦「一一評隲、加之以高序、不啻十朋之亀也、但称揚過当容身無地、然如我柳爺々、誠足称海外知己」

この『海紅園小稿』は、後述する江芸閣にも跋文と評とを加えてもらっている。そして長崎よりの帰途、頼山陽に序、菅茶山・頼杏坪・篠崎小竹には跋文をおくられている。さらに江戸に帰っては、古賀穀堂からは序、古賀侗庵からは跋文を得ている。

しかし笛浦の生存中は上梓されることなく、明治十四年（一八八一）七月に子息の野田鷹雄によって出版された（発売書肆、東京、石川治兵衛）。これには上述の序跋のほか、柳橋・芸閣・山陽・小竹の批評・批点までが付されている。

これに付されている山陽の序文（原漢文）には「古、遣唐留学生有り、名儒自ら出づ。此の事廃されしより、我が文を学ぶ、終に隔靴掻痒に属す」にはじまり次に中国人と接する機会の少なさを「況んや今日海禁森厳、訳吏に夤縁して清客の半面を覩ることを得ば、詫りて幸と為すのみ」（原漢文）と述べている。そして長崎までの六十三日間接した柳橋は浙江の紳衿の子弟であろうし、その詩文の点定も見るべきものがあり、その他の者もまったくの俗人ではなく、その船上での生活を「則ち是れ子明六十日の留学生たりと謂ふも亦た可なり。豈国恩に非ずや。是れ羨むべきなり」としている。さらに、船に積みこまれていた官給の剣稜（日本酒）にははじめ手をつけなかった柳橋たちが剣稜でなければと思うようになったこと、ま

たわが国の文詞を軽視していたのが文士中の剣稜たる笛浦の詩文をみて思いを改めたのでないかなどと続けている。

山陽が留学生と羨むような船中での生活も終わりに近づき、得泰号はやがて長崎に到着し、笛浦が待望していた江芸閣に会うことができた。

もっとも芸閣たち六艘の船団も乍浦を出航してから風波のために分散し、屋久島・薩摩野舟・琉璜島・朝鮮などに漂着し「芸閣漂収七島、絶粒四日、吐血升余、現刻在蓐、座立眠食、均不安」という状態であった。

この江芸閣については未だにあまり知られておらず、これからの調査にまちたいが、この当時のわが国文人たちと親しく交わっていた文化人で、特に長崎に遊んだ詩人たちは彼に教えを乞うたようであり、その詩集などにその名を散見する（たとえば文政十二年刊『文政十七家絶句』の館柳湾の詩に「江芸閣咏三崎嶺名妓色芸兼全者一作三竹枝十余章二云々」という七言絶句二首がある）。

。笛浦が長崎に滞在中も中国人との交流は不自由であったようである。これは三月九日に清水港を出発してから六十三日の航海であるので長崎には大分以前に到着しているのであるが、唐館ではやっと七月三日に笛浦らを招いて飲酒観劇の催しを行っていることからもわかる。

この日に演じられた劇は仙祝王母寿・天官賜福・私下三関など五つであり、笛浦は私下三関に最も興味を寄せたらしくその出典までを質問している。

柳橋「唐館欲于七月初三日、奉請諸君至館、飲酒并観唐山之劇……」

…

啓堂「現在所秘之劇、我公解否」

笛浦「不解」

啓堂「一仙祝王母寿二天官賜福三財神四団円五私下三関」

笛浦「第五条私下三関一劇最妙、敢出何書」

柳橋「書名楊家将裨官楊六郎名忠保、宋代人、乃名将」

。また、この日初めて芸閣と筆談している。『海紅園小稿』の草稿は前もって芸閣に届けられていたようであり、彼も笛浦の訪問を待っていた。

芸閣「通友及楊朱劉三子嘖嘖称先生、且捧読尊著海紅園集、欣慕有日、今天忽聞盛駕到劉景筠館、倉皇訪及、得挹風彩」

。芸閣との筆談は特に文芸的なものはなく、笛浦は日本の名勝松島を宋の蘇軾の詩「飲三湖上一、初晴後雨詩」をひいて西湖に比較し、また国禁によってお互いにその地を訪問できないことを嘆きあっているといったようなものである。

芸閣「聞及此番沿途好山水極多、想佳章満錦囊、祈先生賜教」

笛浦「我有勝情而無勝具、沿途好山水不乏、而不能以好句答之、所謂江山如此一句無者」

芸閣「山水之勝莫過於日本矣、現在如本処瓊山明眉秀麗、在我唐山所罕見」

笛浦「瓊山之勝尋常耳、我邦山水以仙台松島為第一、比之唐山西湖、未知孰劉孰項也」

芸閣「可可恨恨、貴邦邦禁森厳、不能一游其地也」

笛浦「西湖之勝、淡粧濃抹好于晴而奇于雨、髯太守豈欺我哉、僕曾垂涎於其地、而奈官法禁厳、雖欲従之、未由也已、我邦松島八十

八島、毎島一奇奇一一出意外、若使先生観之、山増其高而水加其深耳、然先生之不能到松島、猶僕之不能到西湖、抑亦二家闕典也」

以上記してきたように得泰号上の笛浦や乗組員の生活はだいたい無事平穏のようにみえるが、そのまわりには特筆すべきことが二つはあった。

その一つは、乗組員である陳雲漳の死である。このことについては『筆語』では全くふれていないが、『今世名家文鈔』（僧月性編、嘉永二年刊）巻八には笛浦の「陳雲漳墓誌銘」がのせられており、それによってその辺の事情がわかる。雲漳は船が紀伊に到ったとき病にかかり三月二十一日に没したのである。彼はさきに得泰号が難破しかかった折、雲表に富士を見て「東海の名山を見るを獲ば、死も亦た憾みなし」と言い、死に臨んで船窓に寄らせ「美しきかな海山、吾これを観て斃るれば則ち悔い有る勿きのみ」との言を遺した親日家である。また「船中の客凡そ一百十有六人、而して其の風調洒脱喜ぶべき者、雲漳陳君一人」と評されており、笛浦の船中の友の一人であったに違いない。享年四十三歳、閩県の出身。紀伊の二木浦、海福山最明寺に葬られた。その墓誌銘に笛浦は「日出之邦、南紀之地、浦有二和歌一、瀑有二那智一、厥水厥山、秀且美矣、魂而安耶、何問二海内外一」と曰っている。

もう一つは、四月二十四日に平戸田助浦で浅瀬に乗り上げてしまったことである。乗組員の間に大混乱が生じ、このようなことが原因であろうか、船内の秩序が乱れた。これに対して笛浦は厳しい姿勢をとっていることがうかがわれる記録もある。

笛浦「貴邦仁俗超越万国、不図目侶之暴至於斯也」
柳橋「頑梗不服王化、古昔尚然、況現在下賤水手、又何足怪」
笛浦「船内光棍的目侶、何名何州」
啓堂「明理可悪者、不過同安長楽人七八名耳、決不寛恕」

笛浦は任務を果たして船を下りることとなった。六十余日の間にはさまざまなことがあり、言葉の不自由さからくる不便・誤解もあったろうが友情もめばえたようだ。

最後に啓堂が清水港以来身うちのように接してくれた厚情に感謝するのに対して、笛浦は七言絶句二首で答えて『得泰船筆語』をしめくくっている。その二の結句「人間に漢と和有るを信ぜず」は、中国人と親しく付き合うことのできた笛浦の実感であろう。

啓堂「清港以来経乙百多日、辱眷之厚、譬之無言……」
笛浦「二十八字二首代筆話、聊洩眷眷之情、情長言短、我棣台三位照鑑是祈」

搦管相逢清水湾　勧杯今日別瓊山
玆身設得分為二　一個随君一個還

屈指六旬舟裏過　恩情更比弟昆多
管城写到真心処　不信人間有漢和